

## 第1回広島県公立大学法人評価委員会議事要旨

- 1 開催日時：令和元年7月5日（金）10：00～12：00
- 2 開催場所：サテライトキャンパス広島503会議室
- 3 出席委員：曾余田委員長・浅田委員・木原委員・山川委員・福田委員
- 4 議 題：平成30年度業務実績報告，第二期中期計画期間業務実績報告

◎ 公立大学法人県立広島大学から「平成30年度業務実績報告」及び「第二期中期計画期間業務実績報告」について説明後，評価委員との協議を実施。

【質疑（主な意見：○評価委員・●県立広島大学）】

- 県内からの進学者の割合や県内企業への就職者の割合はどうなっているのか。
- 県内からの進学者は約58%で，県内企業への就職率もほぼ同じ割合。県内への就職率は，県立大学の中では高い割合となっている。
- その意味では，学生が社会に出て，地域に貢献しているものと評価できる。
- アクティブ・ラーニングの導入は，学生の積極性・主体性やコミュニケーション能力を伸ばすことを目的に始めたことだが，具体的にどんな成果があったのか。
- アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた授業においては，グループワークを積極的に行うなどの成果が見られる。また，教員向けの調査では，8割以上の科目で肯定的な回答が得られている。
- ハラスメント防止研修会に222人が参加したとなっているが，参加者が教職員全体の約6割というのは，実績として少ないように思う。
- H28にハラスメントに係る規程を見直し，リーフレットを配付するとともに，研修会をH28は広島キャンパス，H29は三原キャンパス，H30は庄原キャンパスで順次実施した。
- アクティブ・ラーニング導入科目が増えていることについて，導入率はどこまでを目指しているのか。
- 当初，手法導入について7割程度という目標を設定した。これは，授業内でアクティブ・ラーニングの手法に相当の時間を当てたものが対象。グループワーク，ディスカッション，ディベートなど，何らかの手法を取り入れたものであれば，導入率は9割を超えている。
- アクティブ・ラーニングの手法が効果的な授業もあれば，知識伝達型の授業もあり，授業によって向き不向きがある。数値目標の達成ばかりを追うのではなく，目標としての適正值は何かをよく考える必要がある。
- 全体的に緻密にデータを取っており，丁寧にまとめられていると思うが，できれば，数値はグラフ化して可視化した方がよい。TOEIC450点という数値目標について，大学としてどのように考えているのか。
- 450点は大学生が取るべき数値と考えているが，2年生までに9割が取得するということは，かなりハードルが高い。
- 大学として，この450点という数字は十分なものと考えているのか。
- トップを目指す者にとっては十分な数字ではないが，全体として到達することができれば，底上げはできたと言える数字だと考えている。
- 第二期計画を定める際，第一期のあり方を踏まえ，評価の指標となるよう細かく数値目標を設定した経緯があると思うが，今回，改めて見てみると，実態と合わないものが出てきている。このことを踏まえながら，第三期においては，目標を設定するよう検討を進めてもらいたい。

（県立広島大学退席）

【質疑（主な意見：○評価委員・●県）】

- 成果指標のたて方について、一つの項目に対し一つの成果指標があるが、あまりにも多岐に亘っているため、この評価モデルのまま続けると、教員を消耗させることで終わってしまうのではないかと。
- 現行のものは、項目数が多過ぎるため、第三期については、現在、目標設定について検討しているところであり、追って相談させていただく。
- 実際、細かい数値を見るあまり、かえって実態が見えなくなっているのではないかと。
- 細かくなり過ぎると、数字を算出することで手一杯になり、十分な分析ができなくなってしまう。
- 単に数字を細かく見るのではなく、全体をしっかりと見ていこうという方向性は持っているが、具体的なことは、今後、協議させていただきたい。
- 評価結果は、よく頑張っている部分と努力を要する部分がある程度整理していくことになると思う。
- 基本は、第二期の6年間を中心に取りまとめることにしたい。「実践力のある人材の育成」「地域に根ざした高度な研究」「地域貢献」「法人運営」といった大きな柱の中で、重点的に取り組む項目が整理されており、それらについて、どのような成果があったのかを記載するとともに、関連する数字の動きも入れ、それらに対しどのような評価をいただいたかをまとめるということかどうか。
- 取りまとめの方法については、その方向性でよいと思う。第二期計画期間においては、アクティブ・ラーニングの導入で教育に力を入れ、特筆すべき点として、MBAの設置は中々インパクトがあった。併せて、学部・学科の再編などの第三期における取組に向けて準備をしたということ。
- 数字として大きく動いたものとして、「国際化の推進」で、6年前から留学派遣者数が2倍以上に増えている。また、「大学資源の地域への提供」のところで、公開講座の満足度が前期と比べると量的に拡大している。
- アクティブ・ラーニングについては、教育委員会と連携して高大接続に取り組むなど、大学内にとどまらず、拡がりを見せている。
- 外部資金の獲得の中で、科研費の獲得金額が伸びて2億円に達しており、成果が認められる。
- 科研費の獲得件数が、中四国・九州で12年連続1位ということであるが、科研費は件数だけでなく金額も見えていくべき。
- 外部資金の獲得については、社会動向や景気などにも左右されるため、額が多ければよいというものではない点は注意を要する。目標を設定する際、どうしても右肩上がりに考えてしまう傾向があるが、現実にはそうはいかない。計画期間の6年間のうち、増減はあっても、平均してこの程度といった適正値を持つべき。
- 第二期では、数値ばかりを見て、分析や実態の把握といったところが弱くなっていったように思う。第三期においては、大学として色々考えるといったところに力を置いた評価になればよいと思う。
- 県内企業で、中堅以上はほとんどが海外に進出しており、語学力は必要となる。英語について、TOEICが何点と言うのではなく、使えるためには基礎の知識が重要だと思うので、まず、基礎の勉強をしっかりしてほしい。
- 第二期の評価については、これまでの評価方法により進め、第三期に向けては見直していきたいと思う。今後の取りまとめについては、委員長と事務局で進めさせていただきたい。

(委員了解)